

「セシル内科学」原書第14版

P. B. Beeson, W. McDermott 著

小坂 樹徳 東京大学教授 監訳

東京慈恵会医科大学教授

阿 部 正 和

セシル内科学の日本語完訳書が刊行された。これは大変な仕事であったと思う。監訳者の小坂樹徳教授をはじめ翻訳に携わった多くの方々に心から敬意を表する次第である。訳書を手にしてみると、ずっしりと重く、充実感があふれている。そして中を繙くと活字がぎっしりとつまり圧迫感すら感じられる。その内容は既に世界的に定評のあるところで、ここに紹介する必要はあるまい。

本邦で愛読されている英米の内科学は、セシル、ハリソンおよびハーベイといってよかろう。それぞれに特色があるのはいうまでもない。セシルにはセシルのよさがある。今さういうまでもなく内科各論の書としてはまず完璧といってよい。さらにまた、目次をみると章の配列に異色の点がある。第1章の医学の本質がトップにあるのは他の書でもみられるが、第2章が遺伝、第3章が疾患の環境因子となっている。そして次に、免疫疾患、膠原病、関節疾患、原因不明の肉芽腫性疾患となっている。それから先はわが国の多くの内科書の順序とほぼ同じといってよい。

セシルの内科学が数年毎に大幅に改訂され、その度毎に執筆陣が大きく代っている。並々ならぬことである。しかし、このことが本書をして常に新鮮さを失わせない大きな原因となっているのであろう。

さて、セシル内科学の邦訳版が出たことにはどういう意味があるのだろうか。翻訳は、一度手がけたことのある人はよく知っていることだが、本当に難事業である。大体の意味はよく分かるのだが、いまひとつどう訳したらよいのかほとほと困り果てることが必ずあるものである。本書のところどころに、多少の異和感をおぼえる箇所があるのはやむを得ないことかもしれない。訳書の意義は読者にとって読みやすく、親しみやすくするという点にあるのかもしれないが、裏を返すと私たちの原書を読む力の低下をさらけ出したことになりかねない。

また、訳書の出版までにかかなりの時間を要することを考えると、内容が時代おくれになってしまうという欠点も認めざるを得ない。現にセシル内科学の第15版が本年6月には刊行されようとしている。また、米国

の内科の事情と日本のそれとが異なることも認めざるを得ない。従って、セシル内科学の訳書を読むときには日本の内科学から離れないように、日本の立場に立って読みこなす努力が必要であろう。こういう態度でセシル内科学の訳書を読むなら、その価値は測り知れないものがあるはずである。

なお、セシル内科学をみて感歎することに索引がある。まことに詳細かつ周到である。実に70頁にわたる索引である。索引をみればその本の価値が分かるといわれる。セシルの索引はセシルの価値をいやが上にも高めているといつてよかろう。

何はともあれ、ひとつの疾患に遭遇したとき、本書の索引をひいて、該当の頁を開いてみよう。そこには、その疾患の概念から治療までが、まことに要領よく、しかも簡潔に記載されている。読んでためになった、読んでよかったことを実感として感じるであろう。

医学生諸君、研修医諸君、また、第一線の実地医家の方々が本書を座右において折に触れて愛読されることを希望したい。内科学の実力が目にみえてついてくると疑いなしである。きわめて有用な内科書として、セシル内科学の訳書を広く推薦したい。

B 5 頁2062 図172 写真92

原色図7 1978

¥28,000 円600 <医学書院刊>